

「ブリ(上)」 生後3年で10キロ級に

意外に早い“出世”

年末、娘の嫁ぎ先にブリを贈る習慣に代表されるように、ブリは富山の文化に深くとけ込んでおり、ホタルイカ、シラエビとともに県魚として選定されるにふさわしい魚である。

ブリの成長について簡単に紹介する。ブリの主産卵場は九州西方の東シナ海で、産卵期は3～6月である。モジャコと呼ばれる体長数センチの稚魚は、流れ藻に付随しながら対馬暖流に乗って日本海の沿岸各地へ加入する。

富山では7～8月になるとコヅクラ、あるいはツバインと呼ばれる大きさに成長した幼魚が漁獲され始める。10～12月には、それが体長35～40センチ前後のフクラギに成長し食卓に上る。

フクラギは翌春に満1歳となり、冬までに体長55～60センチ前後のガンドに成長する。ガンドは翌年の冬までに体長約65～75センチ、体重5～6キロ前後の小型のブリに成長する。この小型のブリは、さらに翌年の冬までに体長約80～85センチ、体重10キロ前後の立派なブリに成長する。

つまり富山で獲れるフクラギは当歳、ガンドは満1歳、小型のブリは満2歳、10キロ前後のブリは満3歳ということになる。生後3年と数ヶ月で10キロ級に成長するのだから、意外にその“出世”は早い。ちなみに寿命は7年以上とされている。

近年の年間漁獲量を見ると、フクラギは9～12月を主漁期に1,000～2,000トン、ガンドは11～2月を主漁期に数十トン、ブリは11～2月を主漁期に200～300トンとなっている。

昔は3貫目(11.25キロ)以上の体重があるものををブリと称した。大正14年11月30日には、氷見の茂淵定置で平均5貫目(18.75キロ)の巨大なブリが317尾獲れたという記録も残っている。

私は最大で19キロを見たことがあるが、近年、このような超大物は非常にまれで、13キロを超えるブリは、年間漁獲尾数の3%未満である。(井野慎吾)



富山湾で採取したモジャコ(ブリの稚魚)